

避妊チップ

——子どもが足りない。

そう言われて、何年が経つだろうか。

理由は様々であれど、『その国』では、事態を打破するべく、日々様々な研究がなされてきた。

そして、ある日のこと。ついに、画期的な発明が誕生した。

『それ』は、小指の先ほどの大きさの、マイクロチップだった。

『チップ』を女性の身体に埋め込むと、外部からの電波によって、ホルモンの分泌を抑制、あるいは促進させることができる。

『チップ』により、女性はいちいち、自分の生理周期を計算したり、百パーセントとは言えない避妊具に頼らなくても済むようになった。また、産みたいと思った時に、子どもを産めるようになった。付け加えると、出産前検査技術の発達により、障害のある子どもを産んでしまう確率はぐっと下がり、『健康で健全』な子ども達が、ブームの如く増えていった。他の側面としては、過敏なフェミニスト団体が、根強く反発もしたのだが、その件は割愛しよう。

しかし、世の中に『完璧』などという物は存在しない。『チップ』にも、もちろん、弱点があった。外部からの不正アクセスである。『チップ』を一度乗っ取られると、女性の意に反して妊娠してしまったり、あるいはその逆だったりした。

当然、『チップ』を開発した会社、および政府は、法規制でがんじがらめにして、容易には乗っ取られないようにした。

だが、法の抜け目をかいくぐる、狡賢い奴は、いつの世にもいるもので……いつしか、『チップ』の操作権は、闇市場にて、結構な値段で売買されるようになっていた。

利用方法は主に、浮気の物的証拠『作成』だった。『いのちを軽々しく「作成」するとは何事か』

と、またも過敏なフェミニスト団体が騒いだが、圧倒的裏需要の前に、その声は届かなかった。

登場が遅くなったが、ロバート（仮名）も、その裏需要に、興味を引かれた一人だった。彼もまた、妻の浮気疑惑に悩まされていた。探偵を雇って素行調査をしても、尻尾を見せない。あまりに怪しさが無いので、最初、彼は、自分の被害妄想ではないかと思った。

しかし、ロバート（仮名）には、確信めいた勘があった。妻の行動をつぶさにチェックしていると、どうしても怪しい時間帯があった。ロバート（仮名）は、自宅にS O H Oを構えており、基本的に外出はしない。よって、家事なども妻と分担し、表面上は、仲むつまじい夫婦のはずだった。

妻が、買い物に行った折が、やはり怪しかった。「セールをやってたから、少し遠くのスーパーまで行ってたのよ」と、彼の妻はよく言った。だが、その割には、化粧が濃かったり、いつもはつけない香水の香りがした。「閉店間際のセールだったのよ」と言いつつ、遅くに帰ってくることもあった。

ロバート（仮名）の妻も、ご多分に漏れず、『チップ』を体内に埋め込んでいた。おかげで、夜の生活は大変充実していたのだが、いったん不貞の疑惑が持ち上がると、そんな事はどうでもよくなってしまう。

ロバート（仮名）は、深く悩んだ。今や、『チップ+周波数+売ります』で検索すれば、取引業者など、いくらでも見つかる。検索ワードに『格安』を加えれば、さほど裕福とは言えないロバート（仮名）でさえ、十分手が届く金銭で、妻のチップを操作できるのだ。

簡単だからこそ、悩んだ。よりいっそう悩んだ。ロバート（仮名）は、特段に倫理派を気取るわけではなかったが、『証拠』のためだけに、妻と間男の間に、子どもを作っていいものか？ 妻の身体への負担はどうなる？ それに、もし自分が、妻の『チップ』を違法操作したことが、当の妻にバレ

たら……？

ロバート（仮名）の心境としては、千尋の谷の上に渡された、薄いガラスの橋へ踏みださんとして
いるようだった。

このまま、気付かないふりをして、上っ面の夫婦生活を続けるか？

あるいは、思い切って法を破り、決定的証拠を『作成』した上で、別れるか？

はたまた、ドジを踏んで、妻に全てがばれ、向こうから三行半を突きつけられるか？

深刻な三者択一だった。どれを選んでも、これまでの幸せな日常は、ない。

ロバート（仮名）は、丸一ヶ月悩んだ。その結果、『あるアイデア』に恵まれた。

それは、『男版のチップを作れないか？』ということだった。間男に盗られるより先に、自分の種
で妻を確実に妊娠させてしまえば……！

思い立ったが吉日で、彼は、即座に研究を始めた。資金は、クラウドファンディングで募集をかけ
ると、まかなってお釣りが来るほど集まった。

何度かの試行錯誤と苦難の道のりの末、『男版チップ』は完成した。男性の精力を極限まで高め、
元からある『女性用チップ』の効力と併せれば、百二十パーセント妊娠する。『男版チップ』は、爆
発的ヒットとなり、ロバート（仮名）は、数々の賞を受賞し、会社を興せるまでに儲かった。その時
点で、既に、『妻の不貞を暴く』という目的は消え去っていた。

そんな折、彼の妻が妊娠した。

もちろん、ロバート（仮名）は、産むことを推奨し、妻は出産した。

しかし、その赤ん坊……女の子だった……は、決定的なまでに、自分と似ていなかった。彼は愕然

とし、復讐を思い立った。

具体的には、こうだ。自分の開発した『男版チップ』を、極秘裏に赤ん坊に埋め込む。

『男版チップ』は、男性ホルモンに働きかけるので、赤ん坊には、過剰に男性ホルモンが供給され、『健全な女』としての成長を阻害されることになる。結果、心がいくら女でも、身体は男になる。さあ、その板挟みで苦しめ……！ その時のロボット（仮名）は、悪魔だった。

時を同じくして、同様のケースが頻発するようになった。

『心は女でも、身体は男』。

『心は男でも、身体は女』。

年々増え続ける『心と性の不一致』者に、とうとう政府も、『男性』、『女性』の他に、『間性』という定義を作らざるを得ないほどだった。

『間性』の人間には、生殖能力がなかった。また、総じて短命だった。

結果、見かけの人口は増えても、労働者人口は増えず、『その国』はどんどん廃れていった。そして、『その国』が滅亡するには、『チップ』の誕生から、五十年もかからなかった。